

鈴木良先生のご退任にあたって

産業社会学部長 篠田 武司

鈴木良先生のご退任・最終講義にあたりましてひとことご挨拶申し上げます。鈴木先生は1934年9月にお生まれになり、高等学校は神奈川県、そのあと京都大学文学部、京都大学大学院博士課程へとすすみになりました。63年に奈良女子大学文学部附属高等学校に俸職され、その後約21年間、高校教師としてすごされました。立命館大学産業社会学部には、1985年に教授としてご赴任をされました。それ以来今日まで15年に渡って産業社会学部で「社会史」という重要な科目を担当してこられました。この間、学会関係として日本史研究会、歴史学研究会、歴史科学協議会に所属されながら、先生は近代日本社会の諸問題を社会史的手法で分析すること、あるいは近代日本の社会の成立と発展を歴史的に分析すること等をテーマにして研究を続けてこられました。先生は多くの著作を出しておられ、たくさんの論文を書かれています。代表的なものとして『近代日本部落問題研究序説』『奈良県の百年』『西園寺公望傳』などがあります。また、学術情報研究データベースで検索しますと先生は実に多くの論文等を書かれています。「遠山史学に学ぶもの」「近代京都における自由主義思想の源流」「真宗教団批判の展開」「文化財の誕生」「歴史教育の現状と課題」等々です。しかし、やはり先生の研究の中心をなすものは部落問題の研究であると思います。そして、それが同時に実は天皇制の研究でもあることが先生の研究の特徴であるかと思えます。こうした特徴をもつ先生の研究活動は学会で大きな研究成果を残されたと思えます。

先生は大学生時代、日清・日露戦争当時の国際関係を勉強されました。高校の先生になって以降、生徒に部落問題について尋ねられ、それを学習されるなかで日本の近代史は部落問題を抜きにして決して語れないということに気づかれ、深く部落問題の研究に入れられました。その後、実に多くの方々のインタビューをされ、さまざまな論文を上梓されています。先生の部落問題の研究の特徴は二つあると思います。一つは部落問題を抜きにして近代の日本の歴史は語れないということ、近代日本の歴史の真実は部落問題の中にあると部落問題をとらえられたということです。もう一つは部落問題そのものについて、画期的な視点を提唱されたということです。部落問題はそれまで、経済還元主義、政治還元主義の上になんて考えられてきました。戦前には政治構造が、戦後には独占資本が差別構造をつくり出した元凶であると研究されていました。しかし、部落問題から歴史を見るのではなく歴史から部落問題を見ていく、部落問題はそういう形でとらえられなければならない、というのが先生の研究の姿勢であったと思います。それまでの部落問題の研究を一段と高い次元で展開されたという点では大きな功績を研究の上で残されたと思えます。もう一つ大事な点があると思います。人間を等しく認める、人間の権利を守ることの重要性という視点から近代史を見る、あるいは部落問題を考えなければならない、こういう目線が鮮明にあることが先生の研究の特徴では

なかったかと思います。今日の最終講義をお聴きになる学生諸君，物事をみる場合の目線として人間をいとおしむ目線，これから諸君が何かを学ぶ場合，こうした目線を大事にさせていただきたいと思います。もちろん我々研究者も引き継いでいきたいと思います。

最近，先生は『歴史の楽しさ， 地域を歩く』という本を上梓されました。私，この本のタイトルの「歴史の楽しさ」ということはどのような意味なのかで悩みました。歴史そのものが楽しい。歴史を学ぶことが楽しい。素直に，ひとまずはそう受けとれそうです。しかし，そうではなさそうだ。私には歴史を学ぶという自分が楽しい，と解釈した方が先生の場合，納得がいきます。それは，先生は実に学問を楽しそうにお話されるからです。先生は学問を楽しまれている。この本は，実は歴史を楽しんでいる先生の楽しさを我々に伝えようという思いが込められた本だと思います。

私共同僚は，先生から多くのことを15年間のお付き合いの中で学んできました。先生は講義に熱心でした。また学生ばかりか，私達にもいつも学問とは何であるのかということをお話いただきました。最終講義を迎えるに当たって，これからは，こうした機会が減ること，大変寂しい思いでございます。先生はまだまだお元気です。先生は，「我ながら凡庸な研究者である。自信を持てることはない。未だかけだしの研究者であることをよく自覚している。少し自信の持てることといったら，知らないことに挑戦するのが大好きで好奇心が旺盛なことくらいだろう」と，本の中で語られています。知らないことに挑戦することが大好きで好奇心が旺盛だと，このお年になってさりとて言うのける先生のすばらしさを思います。ご退職になった後も，後輩に対して引き続きご指導をいただくことを心からお願いしまして先生のご紹介に代えさせていただきたいと思います。

〔最終講義〕

歴史を学ぶ楽しさ 研究と教育のあいだ

鈴木 良

みなさん今日は。いつもの通り講義をさせていただきます。この前，学生諸君に講義の感想を書いてもらいましたら，最終講義では泣かないで下さいというのがありました。私は実は晴ればれしているのです。来年からは毎週，毎回，講義レジュメを作りなおすのに苦労しなくてもよいかと考えています。今日のレジュメもそうですが，私のはいまだに手書きで，毎年作り変えています。こんなことをするのは，よく言えば職人肌。要するに古くさいのです。

ある学会で戦後歴史学について報告があり，日本近現代史研



究では「鈴木良などが戦後歴史学の最後の人である」という報告があったそうです。僕は出席しなかったのでもた聞きですが、まるで遺物的存在のようです。古生物学ではシーラカンスやメタセコイアなどを遺存というそうです。私はたぶんその一種でしょう。

しかし、まだまだこれからやることがあると思っています。何をやりたいのか。それはまだ秘密です。古い西洋のことわざに「勝ってから誇れ」というのがあります。やらないうちから、これをやりとげたいというのはよくない。

私の尊敬している歴史研究の先輩に故馬原鉄男先生がおられました。ワープロの前で原稿を打っている時に、ボタンと前に倒れて亡くなりました。そういう死に方ができたらいいなと思っていますが、私のような小人はそうはいかんだろうと思っています。

今日のレジメを作りましたが、思うようには出来ていません。これまで勉強したことをすこしまとめてお話ししたいのですが、たぶんうまく行かないでしょう。しかし研究は未完成がよろしい。ボケなくて済みます。

いよいよ大学教員生活で専任としては最後になりました。高等学校の教師を21年間しておりましたので、大学に来て困りました。図書館の職員と仲よくなりましたので、欲しい本がすぐに手に入る。高校の教員の時はそうはいかない。大阪中之島の府立図書館に通ったんですが、学校が終わって7時か8時に行って、閉館の9時まで本を読んでいました。その時の方が熱心に読みました。

今は快適すぎて、すぐに本が手元に入る。本をコピーすると、読まないのに読んだような気になる。それと同じです。不思議なものです。貧乏な方がいい研究ができるようです。皆さん、心得ておいて下さい。条件が恵まれないから勉強ができないというのは間違いです。逆でしょう。

『歴史の楽しさ 地域を歩く』(部落問題研究所刊)という本を最近出しました。私の勉強の仕方は、とにかく歩くこと。いろんなものを見ること。それから考える。こういうやり方を続けてきました。ただ歩いてみてもしょうがない。そのなかに問題を発見する、課題を見つける。なぜだろうと考えることを続けてきました。

ある学生が書いてくれた感想文で新しい発見がありました。「先生は、なぜかと問うことが大事だと言われましたが、私たちはなぜということを考えるのが不安なのです」。そうかも知れないと思いました。先生が言うことを暗記する、それが安全であると思う世代なのかもしれない。それなのに私たち教師は、なぜと問うことが大切だといつもいっている。考えさせられました。

しかしなぜということをお問わないと面白さが生まれぬこともたしかです。なぜという問いを出せるようにみちびいていく、そこに今の教育の大事なところがあるのではないかと思います。

学問はなぜという問いがなければ成立しません。問いを持つ、若い諸君も老人も疑いを持つ。生涯学習と言われますが、そういう学び方を持っていることは楽しいことです。そのことを皆さんにお話をしていきたいと思っています。

1. 社会史の講義

自分の体験からお話をします。15年前、立命館にまいりました。高校で教師をつづけたいと思っていたのですが、産業社会学部の遠藤晃先生その他の方から立命館に来ないかとお誘いを受けました。以後、社会史の講義を今日まで続けてきました。

社会史でいったい何を教えるのか。まさに試行錯誤でありました。社会史でどんなことを教えたらいいか。その頃、日本でもフランスのアナール派の社会史研究の手法が流行ってきました。歴史のなかの微細なものを取り上げた、とてもしゃれた社会史がブームになりました。フランス語でマンタリテ(Mentariété)、英語のMentarity、「心性」の歴史などが好んで取り上げられる。

私も微細な問題から大きな問題に迫っていくのは大好きです。しかし、それは小さなもののなかに、大きな歴史をみるから面白いので、それには見抜く力が必要になってきます。私は社会の構造的変化を探るのが社会史の主題である信じて疑いません。もちろん、社会の構造の内実は、社会諸関係を基本にしながら、生活・文化などさまざまな問題を含んでいます。

しかしそれを一方的に学生の皆さんに語ったところで意味がない。皆さんがみずからつかむ方法はないかと考えてきました。今年度の社会史の課題は、二つレポートを出さないといけない。まず「聞き書きを作る」。75歳程度の人の聞き書きをする。これはなかなか面白かったらしい。

そこでわかったのは、学生諸君が老人から聞き取る言葉を持っていない。そうした経験をもっていない。日常的につきあっていないからでしょう。これは大変なことだと思ひまして、皆さんに聞き書きを作ってもらいました。自分のおじいさん、おばあさんに聞いたのが多いのですが、一つずつじっくり読みました。600人分ありましたので、やっと読み終わったところです。

またすぐに次のレポートが届くでしょう。2つ目のテーマは「洛中を歩く」です。京都市中を歩いて何でもいからおかしいなと思ったことを調べてきなさい。参考文献も何も教えない。聞き書きの方法を使って勉強する。難しいが、やったら面白い課題だと思っています。

みずから発見すること、これにまさるよろこびはないのです。マニュアルはありません。屋根ばかり見る。屋根の上に鍾馗さんが乗っている。店の看板ばかり見る。町並みをスケッチしてくる。とくに裏店ばかりみる。西陣の長屋ばかり観察する。あるいは地面ばかり見る。マンホールの蓋でどれが一番古いか。マンホールだけでも歴史を感じ取ることが出来る。誰もいない細い路次を歩いてもいい。奥まったところにあるお地藏さんに目をつける。そして老人に話を聞く。

しかし年寄りに聞くとと言っても、老人が語らないことがあります。人々は語りにくいことを持っている。それは主に戦争の記憶のようです。つらいことは人々は語らないものです。戦争の記憶を得々としゃべる人は疑わしい。レポートのなかに「戦争の話になると、おじいさんの話がピタッと止まってしまった。長い沈黙があった」。その意味を考えているところがいいなと思いました。

人々の語る言葉の重さを発見する　これが歴史の発見です。どうして沈黙が生まれるのか。それが解釈できるようになると、聞き書きはかなりの経験を積んだことになります。それを生かして今度は町を歩く。そして皆さんが勉強したい課題をみつけてほしい。このやり方をとれば、外国に

行っても同じようなやり方ができる。面白さはどんどん広がるのです。

こういうやり方に私はどのようにして気がついたのでしょうか。それは私の体験によります。私が今まで書いたもの、『歴史の楽しさ 地域を歩く』などを読んでいただければわかります。歴史それ自体が楽しいはずはない。歴史の楽しさというのは、歴史を発見することです。そして出来ることならば、私たちもまた、微力ではあれ歴史を作る側に身を置きたいと思っている。それが歴史の楽しさという意味なのです。そんなことはむだなこともわからない。でも私はそういうふうに考えたいと思っています。

そうしたことをやり始めた方法論を私はフランスの社会史家であるマルク・ブロックから学びました。マルク・ブロックの名著『歴史のための弁明』は私の愛読書の一冊ですが、その中に「歴史家は歴史を『さかさまに』読むことによってしばしば利益を受ける」という言葉があります。今から昔を遡る。これが産業社会学部における社会史講義の方法に有効ではないかと思った。

現在から過去にさかのぼる。現実そのものは過去を表現しません。それ自体に意味があらわれているというわけではありませんが、マルク・ブロックは「風景の目につく特徴・道具、あるいは機械の背後に、また表面上は冷淡きわまる文書やそれを制定した人々とは一見全く無関係に見える制度の背後に、歴史が把握しようとするのは、人間たちである」。こういって彼は歴史の方法を語っています。

そして「よい歴史家とは、伝説の食人鬼に似ている。彼が人間の肉を嗅ぎ出すところ、そこにこそ、えものがあることを、彼は知っているのである」というのです。獲物の匂いを嗅ぎ出すには直観が必要でしょう。

一つの体験をお話しましょう。私のところにある方から本が送られてきました。『見えないものを見る力・社会調査という認識』(八千代出版)です。その本の一つの論文に2枚の図が入っていました(第2部第6章、三浦耕吉郎氏稿「環境調査と知の算出」)。

何か見たような図だと思ったら、実は私たちが作った図です。書かれた方は社会学者です。地図の出典に地域史研究会とあります。この研究会の住所は立命館大学鈴木良研究室です。

奈良県大和郡山市を流れる佐保川という川があります。下流で大和川に合流する。この川の近くに県営の食肉流通センターが作られることになり、これに反対する住民運動が起こりました。県営食肉流通センターが作られると、川の氾濫が起こった時に、大変なことになるから反対するというのです。

図1をご覧ください。「請堤と遊水地の分布」という題がついています。遊水地を知っておられるでしょうか。川が溢れて増水すると、矢印のところに水がはけるようになっている。土手に約30センチほどの窪みがある。そこから水が外に出ていく。水が押し寄せて来きますから、集落があるところに請堤(うけづつみ)という水を請けるための堤がある。高さが50~60センチあるもので守られている。図の下の方にある筒井集落は勢力が強いから完全に守られている。水が漬きません。

これと図2「土地開発の状況」を比較して下さい。公共施設が遊水地に建っているのがわかります。なぜでしょうか。土地が安いからです。県の施設がどんどん建つ。このようにして古くからの

村落や百姓の知恵が失われていくのです。

川が氾濫するから百姓たちは水漬きに強い稲の品種を用意する。洪水になると翌年は豊作が約束されるのです。こういう知恵はどんどんこわれている。県の施設には、作られた地下室に水を溜める設備を作っているからいいではないかという。

この社会学者は、私たちの調査が遊水池についての正確な情報をつくったこと、さらに地域全体を俯瞰する治水地図を作ったことなどに意義を認めて下さっています。私たちは歴史を勉強していますので、この社会学者が私たちの仕事を評価してくださったのはありがたいと思います。しかし、私たちはそこからまだ先に行くのです。図で表された集落はどのようにしてでき上がったのか。そこにおける人間と人間の関係はどのようなものであろうか。それは今どのような状態にあるか。こういうことを知りたい。

この辺りを歩くと閉鎖的な農村の姿が目につきます。環壕でかこまれた典型的な集村です。囲作り（かこいづくり）と呼ばれる農家の建物が集落を作っています。環濠のまわりに田畑が広がっ

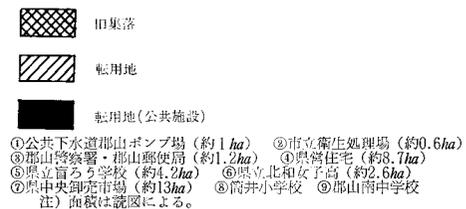
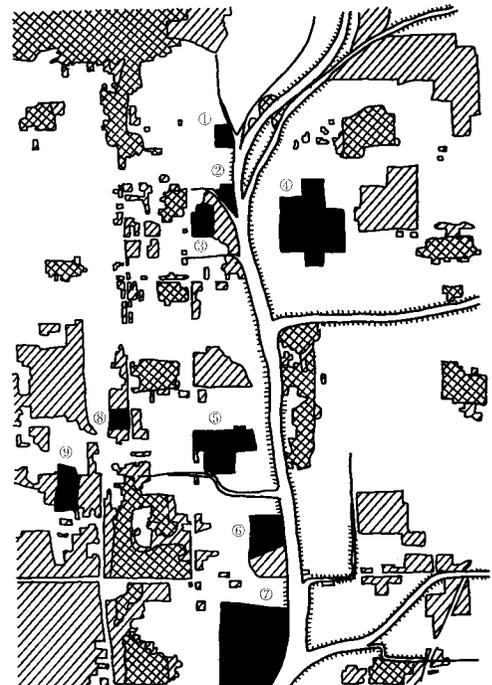
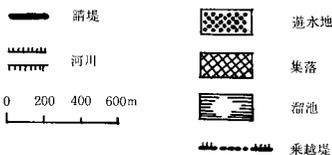
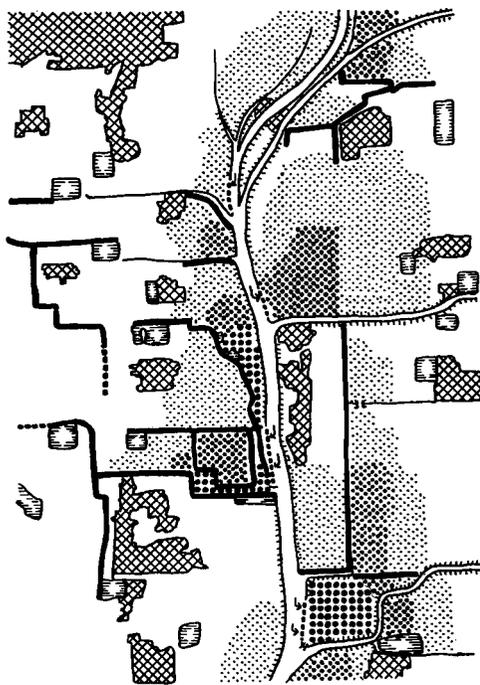


図1 請け堤と遊水池の分布(第4図の一部を拡大)

図2 土地開発の状況

ています。この集落の家数は江戸時代とほとんど変わらない。どうしてそうなるのでしょうか。

現状をふまえて、さらに深く追及する。この村落はどんな内部構造をもっているのか。この村は周辺の村落とどういう関係にあるか。治水だけではない。水の利用、農業の水利を考えなければいけない。そういうものの歴史的变化を考察しなければならない。住民の切実な声に友人たちと研究者として応えようと思いました。

地域に伝わる治水技術を明らかにしようと考え、現地を歩きました。古文書も読みました。この地域の古文書を地元の人々の協力で見ることができました。洪水のために今年は減収になったから、年貢を負けてくれという絵図もありました。これらを見るのはうれしいことでした。

農業史の専門家といっしょに、聞き書きをフルに活用して自費出版のパンフレット『治水の地域史』を作りました¹⁾。地域社会の構造の歴史的变化を考えるのに実により勉強になりました。だんだんやっているうちに、近畿農村の内部構造、そこでの社会関係の変遷に興味を持ちました。これと未解放部落、被差別部落と言われている部落はどういう関係があるかも問題です。こんなことを勉強するようになり、都市と農村の変化を歴史的に位置づける仕事をやろうということになりました。立命館大学に来て講義をするなかで気がついたことです。

ここで大切なことは、現代の問題を考察するには歴史的視点が大切だということです。そうでなければ、私たちの社会分析は浅薄なものになるのではないのでしょうか。

2. 都市の社会構造の変化

農村は自信があったのですが、都市は手をつけることができませんでした。私が書いた論文について「都市はどうなるのか、鈴木は答えよ」という声が出てきました。そこで京都にまいりましたので、京都を歩いてみたいと思っていました。京都と言っても広い。

産業社会学部に15年いて8回ゼミを持ちました。2回を除いて6回、学生諸君の小冊子をゼミで出しました(いずれも図書出版文理閣刊)²⁾。最初が『原爆投下と京都の文化財』 2回目のゼミ(1987年度)で作りました。京都は原爆投下の第一の候補で、4つあった候補の1つでした。京都が一番効率がいいというのがアメリカの判断でした。なぜか。山で三方を囲まれている。大学がたくさんあるから新型爆弾であるとすぐわかる。他の都市に落とすよりも効果がある。

ところが戦争中に京都は文化財があるから爆弾を落とさなかったという伝説がありました。その関係を調べてみようというのがこの本です。学生諸君はよく勉強してくれました。1人が国立国会図書館まで行き、アメリカの国務長官だったスチムソン日記の英文を読んでくれました。京都に原爆を落とすのは対ソ戦略から政治的効果にマイナスになる。だからやめるといなのです。

戦後、ランドン・ウォーナー博士が京都と奈良の爆撃を回避させた恩人であるという説が流れました。その発信地はGHQだということを私が以前に指摘しました。そういう伝説の嘘をよりくわしくあばいたのがこの本です。

次が力作で『占領下の京都』(1990年度)です。学生諸君がこれまで研究のなかった問題にとりく

んでくれました。終戦連絡京都事務局の『執務月報』や占領下の『京都新聞』を読んで、学生たちが一所懸命に事実を調べる。夏休みを返上してやる。私は立命館高校の校長をしていましたので、あまり面倒を見てやるのが出来ませんでした。ゼミの時間に発表を聞くだけです。それがよかったようです。

学生は当時の記憶を訪ねて、聞き取り調査に歩きました。私も気付かなかったのですが、アメリカ兵は白人と黒人とが別のところで宿泊しているようなことも分かりました。『占領下の京都』は力作で今でも珍重されています。

たとえば市の植物園がアメリカ軍の将校宿舎になりました。宿舎がどういうふうに分布して、どんな木が切られたかまで京都府庁の文書で調べた。学生のすごい努力です。小冊子が出来上がった後、学生がいました。「事実というには実に深い、調べれば調べるだけ疑問が広がる」と。私が教えこむのではとてもできなかったと思います。

次は『高度成長と京都』です（1992年度）。副題に「水道・市電・伝統産業・景観・ベンチャー企業」と記されています。チンチン電車の廃止や西陣の衰退などを取り上げたものです。これらには一部に聞き書きが入っています。学生たちが年表を作るのに約15年分の「京都新聞」を分担して見ました。重要事項1年分をB4で5枚も持ってくる。「その項目は取らない」と言うと、足をバタバタさせて「折角調べてきたのになぜ載せないのですか」と怒っていました。「重要度が低い、他の項目と連関させる」と指示して、どんどん項目を減らしていく。

そこで学生たちが気がついたのは「ああそうか、年表は作られたものなんだな」ということです。できあいの年表はない。作るものの選択の結果なんです。選択の目が働いている。そういうことを学生たちが学んでいきました。この時も、私はガン手術で入院して、学生にあれこれ指示は出来ませんでした。それがよかったのでしょう。

次の『京に生きる・庶民の半世紀』（1996年度）からは、聞き書きを作ることにしました。びっくりするような話が飛び出してきました。その次が『ききがき 京の職人・手に生きる』（1997年度）です。この聞き書きをしようというのは私の提案です。京都は伝統的技術の集積地です。職人さんを訪ね、技と人生を聞きとる。よく期待に応えてくれたと思います。

今年度（1999年）は何もいいませんでした。「君たちでテーマを作りなさい。全部自分たちでやれ。先輩がやったことを見習え」とだけいいました。できあがった時は学生以上にうれしかった。まったくの学生の自主的活動で、テーマも自分たちで決めました。これが『西陣を彩る』（1999年度）です。

指導者である私は、京都について学生諸君の何倍かの知識を持つ必要があります。学生の発表の前にひとりで歩きに行ったことがあります。私は京都について学生たちと一緒に学んできました。京都の特徴はどこにあるか。それは町（ちょう）と学区にある。1897年からは町は公同組合と名前を変えます。それと学区が京都を解くカギです。それが分かってきて京都歩きが楽しくなりました。

ところが今、町が激変して人口が減っています。西陣機業をはじめとする伝統産業が衰えているからです。『西陣を彩る』で学生諸君が聞き書きをしたのを読んでいくと、何か訴えるものがある。

ジーンとくるものがある。永六輔さんの『職人』(岩波新書)では、職人さんはあまり勉強と無縁の人のように見えますが、とんでもない話で、菓子職人も西陣織の職人にも大学卒の方がたくさんいます。皆さんや私の知恵よりもはるかに深いものをお持ちです。

綴れ職人の半田洋三さんは西陣織の帯職人です。「わたしらは西陣に残された最後のんじゃないかと思う」と言っておられます。今、そういうもろもろの技術と人が消えつつある。半田さんとお会いしましたが、何か私と気持ちが通じあうところがあります。塩芳軒という黒門通りのお菓子屋さんの高屋都美江さんという方に学生がお話を伺ってきました。和菓子作りの聞き書きも興味のあるものでした。北野天神さんとずいき御輿などの聞き書きもすぐれています。

現状の西陣と最盛期の西陣とを比較してみる。職人はどんなところに住んでいたのか。西陣の建築の特徴は何か。どこに丁稚は寝たのか。こういうことを調べないと十分な歴史研究とはいえないでしょう。京の職人の聞き取りで、丁稚だった人が、おばあちゃんと子どもと、その隣に私が寝たと書いてあって、そうかと思いました。

和菓子屋さん是最盛期に職人が30人いたそうです。徹夜で作業をやっているから15人は仕事をしなくて15人寝ている。そういう細かなところがわかってきます。面白いものだと思います。私の京都歩きは学生に教えられて歩いてきたと言えます。

しかし京都はそれだけでできあがっているわけではありません。同和地区や在日朝鮮人の集住地区があります。そういうところを全体として頭に入れようと勉強してきました。京都の都市構造、構造的な把握、その歴史の変遷について自分の仮説を立ててみました。

第1の時期は近世の京都、江戸時代の京都です。江戸時代に京都は現在の原型ができあがった。明治期に現在の都市構造が成立した。これが第2の時期。近代京都の都市構造が形成されました。そして1920年代に変化が開始されて、戦後、高度成長期が第3期で、これ以降から現在まで、次第に古い京都の町の社会関係、有力者の支配・主導権が衰えていくのではなかろうか。

地域の中で民主主義的な力が大きくなっていく。以前には表通りの大店に文句を言えなかった人たちが文句を言えるようになったのが1920年代です。それが現在につながっているとらえることができると思います。これについては『歴史の楽しさ』に入れた「近代京都の都市構造」をご覧ください。

来年から大阪を歩こうかと思っています。大阪は京都よりもっと複雑ですから相当歩かないといけない。そういうところに情熱を燃やしています。都市の構造と関係する農村の構造も調べたい。地域全体をつかまえない。

そういうことをゼミの学生諸君と勉強するなかで学んできました。ありがたいことだと思います。そうしたなかで私自身の研究も幅が大きく広がってきたと思っているのです。聞き書きの方法については、まだ不十分なものしか書いていません。歴史学研究会編『オーラル・ヒストリーと体験史』(青木書店)のなかに「ききがきと歴史研究」という小論を書いていますので参照してください。

3. 「捨て育ち」ということ

私の教育論について少し語らせて下さい。聞き書き『西陣を彩る』の前書きで、私はこう書いています。「今から七年ほど前、著名な数学者であった故小堀憲先生に捨て育ちという言葉が教えられた。小堀先生が研究をしようと数学研究室に入ったがいいが、先生は何も教えてくれない。やむなく自分で本を探し、わからないことを聞きにいったら先生はこの本を読めとだけ教えてくれたというのである。私は1998年のゼミナールを開くに当たって宣言をした。学ぶのは君たちである。だから何も教えない。居眠り教師がいい。教育の理想は捨て育ちである。京都の庶民の聞き取りをやること、これだけを指示した」と。

私は今でもそう思います。学ぶのは学生諸君です。私も一人の研究者として学びます。それは私の楽しみです。どうか、これからも皆さん自身が学んでほしいと思います。それが私の考えていることです。皆さんも聞かれたことがあるでしょう。Educationやeducateの語源はラテン語の引き出すという意味からきてるとよくいわれます（もっともこれは研究社「英語語源辞典」によると俗説だとありますから、知ったかぶりは大怪我のもとですが）。学生の力を引き出すのが教育だということは僕の確信です。

皆さんは原石です。ダイヤモンドやエメラルドのような原石である。しかし原石を他人が磨くわけにいかないのです。原石は自分で磨かなければならない。私たち教師は、そのようにし向けなければなりません。したがって学生の力を引き出していくためには、原石を見分ける力を私たちが持つと努力をしなければなりません。それには、研究者が自ら学んでいかなければいけない。研究の前進がなければ学生の持つ力を見抜くことは出来ないのではないのでしょうか。それが不可欠でしょう。

そして待つ余裕が必要です。よくいわれますね。若いお父さん、お母さんが余裕がない。早くやりなさい、勉強しなさいが親の口癖になっているようです。待つためには引き出す側の余裕がないといけない。それがいちばん大切な力です。本当の知とは、隠れた才能を見分ける力や待つ余裕を持つことを意味するのではないのでしょうか。

では近代日本でそうした教育観はどこに源があるのでしょうか。開発主義と注入主義が近代日本を貫く二つの教育の原理といわれます。開発主義というのは自ら学ばせる。注入主義は与えるものを上からつぎ込む。暗記ということです。

一概にどちらがいいと言えませんが、私は「発達」という言葉が好きです。英語のDevelopmentですね。正確に言うと中国の古典、漢語に元があります。この訳に変わったのは明治以後です。社会語、社会で使われる言葉、たとえば産業社会学部のコース名、産業、社会、都市、生活、発達、福祉も最近できた言葉です。発達は古いのです。そういうことに私は興味を持っています。

発達という言葉が面白いと思ったのは、この大学に来て、岩井忠熊先生のおすすめで『西園寺公望傳』を作るのにすこし協力した時です。この伝記の勉強は楽しかった。西園寺公望は傑物で一筋縄ではいかない人物です。1871年にフランスに行き1880年まで10年間パリで暮らしたのです。パリ

大学に入学して法律を学ぶのですが、2年までは勉強したが、3、4年は学校に行ったのに行かなかったのか、卒業出来ませんでした。西園寺はパリ大学の勉強が面白くなかったようです。

下宿の近く、オデオン座の近くの通りにあったエミール・アコラス(Emile Aollas)という人の塾に入りびたっていたらしい。自分はアコラスの門人であるといっています。そこでの勉強が面白かったらしい。この人のことは中江兆民の『三酔人経綸問答』にも出てきます。兆民も最も影響を受けたのがこの人物でしょう。

アコラスは実に面白い人物です。フランスでは大学の教師になるには教授試験といのがあって、これに合格していなければならなかったのです。しかし彼はその資格を持っていませんでした。ですから補習塾のようなものを開いていた。アコラスの主著は『政治科学の哲学』(Philosophie De La Science Politique,1877)で、西園寺も中江兆民もソッコンの惚れ込みようで勉強したようです。

エミール・アコラスは民主主義の道徳を強く主張していたからです。彼はその主著で「友人の発達(開進発達)と自分の発達は相互に補い合っている。自ら発達しようとするなら他人の発達が条件になっている」という意味のことを述べています。「その身の愛すべきを知らば、またよく人を愛せざるべからず」(アコラス主著の翻訳書、西園寺序文、中江兆民監訳、『政理新論』1884年)³⁾。自分を愛することは人を愛することである 相互に発達するのが民主主義の基礎であると述べています。西園寺はそこから「自愛」とか「友愛」を大事だといったのだと思われます。

西園寺公望にたいし、日本へ帰って政治家になるのもよいではないかとエミール・アコラスがすすめた。西園寺が「日本では政治家になると思うこともいえず、時々ウソを言わないといけない」と答えたそうです。アコラスが驚いて「日本では政治家が時々ウソをいうくらいですむとは。驚くべきことである。フランスでは時々ですら真実をいうものがいない」といったそうです(竹越与三郎『陶庵公』)。みなさん、あまり笑われませんか。今の日本を思うと感慨深いものがあります。

西園寺は教育論をこの人から受け取ったようです。アコラスが「教師は一冊の目録の如きものである」と云ったと西園寺が述べたことがあります。目録つまりカタログですから利用するのは学生です。自分たちで引きなさい。教師を活用するとアコラスは教えたそうです。教師が何かを教えるのではない。学ぶのは学生である。学生の要望に答えるのが教員の役割であるということでしょう。

西園寺公望は民主主義の倫理をその原理から考え、それを何とかして日本に移しかえようと考えた。中江兆民とともに1880年に『東洋自由新聞』を作り、その社長となった人ですが、西園寺、中江の連携がそういう教育を日本に導入しようとしたといえるのではないのでしょうか(これらについて拙稿「西園寺公望とフランス」後藤靖編『近代日本社会と思想』吉川弘文館所収)を見て下さい)。

明治政府の立場から井上毅らが教育勅語を作った。1890年のことです。それに対して西園寺はあはいけない。国家中心で、国家を個人よりも強大に考えている。「一旦緩急あれば」、いざ戦争になったら国に奉じなければいけないという考え方に西園寺は反対でした。「科学や英語や女子教育を重視せよ」と文部大臣時代に言明しました。そして明治天皇から教育勅語を改定することの許可を

受ける。立命館大学に西園寺家から寄贈された文書のなかに「第二次教育勅語」の草案がありまして、それを見た時はびっくりしました。

日本の教育は、明治以降、国家中心であって、もっぱら注入主義、効率主義、暗記が強制されている。それは官僚養成にはいいかもしれないが、市民を育てるにはだめである。自主的な活動の重要性を西園寺は強調したかったのでありましよう。自分の頭で考えること、考える国民を生み出すこと。これが西園寺と中江兆民の大きな願いでありました。

中江兆民は1901年、死の直前に書いた『一年有半』の中で「総ての病根此にあり」という小文を書いています。ここにこそ日本人の欠陥があると指摘しています。

日本人は変わり身が早くて、一向に頑固でない。だから西洋での宗教戦争のような悲惨な戦争がない。明治維新もほとんど血を流さずして成功した。そして「旧来の風習」を洋風にあらためて不思議に思わない。「浮騒軽薄」、「薄志弱行」という病気の根っこもここにある。小利口であって大きな仕事をするのに不適切な理由である。きわめて常識に富んだ人民ではあるが、常識以上に出ることは到底望むことは出来ないであろうと述べています。

そして中江兆民は最後にこういっています。「すみやかに教育の根本を改革して、死学者よりも活人民を打出するに努むるを要するは、これがためのみ」（難漢字をひらがなに改めた）これ以外に方法がないと言っています。今から100年前の言葉ですが、ドキッとするものがあるではありませんか。

いくら効率的に暗記させても、それは小利口な人間、さらには死んだ学者しか作れない。教育の根本を改革せよ、そして生きた民を作らなければならないというのです。

教育の根本を改革するとはどういうことでしょうか。それは考える国民を作るということです。そして民衆が課題とすることを考えるように仕向けることです。考えることは自力でしかできない。どんなに偉い教師でも、皆さんに考える力をつけることはできません。その力は学生みずからががちとなければなりません。そのためにどうしたらいいのでしょうか。私もよい策をもっているわけではありません。

しかし今の教育の現状を見ていると、教育が、ますます民衆の生活、国民の当面する課題から遠く離れて、効率を重視する方へ歩んでいるのではないかと、私は真剣に憂えているものです。

4. 歴史意識を育てること 歴史を学ぶ意味

では今われわれはなにを考えなければならないのでしょうか。その答えは現代世界のなかにあるはずです。世界の情勢をながめてみましょう。

いまアメリカのグローバリズムの支配ということがいわれます。私はカタカナ語は使わないのですが、やむを得ず使います。よい訳語がないのですが、アメリカの支配政策、世界支配とでも訳しておきましょう。20世紀は世界的にアメリカ主義が浸透していく時代でした。そこで21世紀に向かう世界史をどう見るか。

私の尊敬する歴史家に故上原専禄先生という方が居られました。1945年、敗戦の年の論文で「20世紀には二つの歴史意識がある」と言われた。一つはアメリカのプラグマティズムにもとづく歴史意識である。18世紀以来の「普遍的人間」観に立つもので、素朴な成長への信頼というものがアメリカの歴史観である。

もう一つはソ連の社会主義である。ソ連の社会主義は最近崩壊しました。スターリン主義の崩壊といったほうがよいかもわからない。マルクスの歴史把握から分化したものと考えられますが、上原先生は、その人間観には「マルクス自身程の苦しみ」があるとは考えられないとすでに言っておられました。私は歴史家の洞察の力を思います。『上原専禄著作集』(評論社)は、まだ完結していませんが私の愛読書です。

上原先生は、現代の課題から問題を発見する方法を課題化的認識とよび、これを考えるのが現代の歴史意識であると主張されました。ソ連が崩壊して、市場原理にもとづくアメリカ主義 = グローバリズムが世界を支配するようになりました。しかし21世紀はアメリカの世界支配が揺らぐ時代になるのではないのでしょうか。

にもかかわらず、そのなかで日本人は今も経済大国の虚像を肯定し、大きな不安をもちながらも、アメリカ主義をまねをしてはばかりず、それらを「合理化」する風潮があるように見えます。

いま私たちは、自分の頭で考えなければいけません。確固とした歴史認識を作り上げる必要があるのではないのでしょうか。私たちは世界史のなかの日本を考えたいと思います。地域の歴史のなかに世界史を発見する。世界は相互に結びついているのであり、日本の地域のなかに世界史を発見するのは研究の根本的主眼であると思います。

一例を挙げるなら沖縄の基地返還が問題になっています。アメリカは普天間基地の移設で海上ヘリポートを200年継続すると言っている。しかし、アメリカと地続きのパナマでは基地が完全に撤去されました。この差はどうして出てくるのでしょうか。考えてみようではありませんか。

世界とアジアは今後どうなっていくのか。そういうなかで日本はどういう方向へ進むのか。それと私たちの研究がどういう関係があるか。私にもまだ全部解けていないのは勿論です。たがいに考えつづけなければなりません。

このような論点について「歴史教育の現状と課題」(『岩波講座日本通史・別巻2』)で若干書きましたが、十分なものではありません。

むすびにかえて

交響楽は第4楽章までであるのに、私の話が3章と終楽章の途中で終わったのは、これからさらに勉強してみたいということです。私は平凡な研究者ですから、せめて長生きして、21世紀に日本がどういうふうになっていくのか、世界がどう動くのか見きわめたい。私の大きな願いであります。

日本の民主主義の前途に希望を持ちたいと思います。しかし単純に願望を持つだけではいけない。皆さんも含めて、若い人も老人も、現代の課題に挑戦してみなければなりません。学問はそのために

ある。歴史の楽しさは、私たちが微力ではあれ歴史を作るのに参加すること、そのために学ぶということが楽しいことだと思っているわけでありませう。

以上で老書生の講義はひとまず終わりです。学生のみなさん、先生方、ほんとうにありがとうございました。心より感謝します。

註

- 1) この調査は農業史の徳永光俊、宮本誠、私と同学の竹末勤の3氏とともに行なった。徳永光俊『日本農法史研究』(農文協)、宮本誠『奈良盆地の水土史』(農文協)に、その成果が入っている。
- 2) ゼミで作った6つの小冊子は、いずれも3回生が1年間で作ったものである。わずか1年であるから学生たちは大変だったと思う。私は激励するだけであれこれ指示したわけではない。すべて図書出版文理解で作っていただいた。全部千円で千部作った。そのうち半分を学生が分担して売る。残りを書店などで販売したが、出版社には毎回迷惑をかけた。黒川美富子社長と同社の皆さんにお礼を申し上げる。
- 3) この部分の原文は次の通り。

En effet, s'il y a une chose incontestable, c'est que nous nous aimons nous-meme, c'est que nous aimons notre propre developpement; or, comme ce developpement a pour conndition celui des autres, il est necessaire que nous arrivions aussi a aimer le developpement des autres.

『政理新論』(前編卷之上, 中江兆民校, 酒井雄三郎, 白石時康共訳, 小笠原書房, 1884年7月)では、この部分を次のように訳している。「蓋シ(けだし)人ノ其身ヲ愛スルハ天ナリ。其身ヲ愛スルニ因リテ、其身ノ開進発達ヲ求ムルモ亦タ(また)天ナリ。人誰レカ之ヲ疑ハンヤ。然リト雖ドモ其身ノ開進発達ハ他人ノ開進発達ト常ニ相伴フ者ナリ。故ニ若シ其身ノ開進発達ヲ求メバ、須ラク(すべからく)他人ノ開進発達ヲ助成セサルベカラズ。其身ノ愛スベキヲ知ラバ亦タ能ク人ヲ愛セザルベカラズ。」

苦心の翻訳ではあるが、かなりの意識であることが分かる。原文では我々と複数であるのが、この訳では人、他人とも単数のように読みとれる。

すずき りょう
鈴木 良教授主要研究論文目録 (2000年4月作成)

[1] 著書 (編著・共著を含む)

- (1) 『奈良県同和事業史』 共著 奈良県 1970年5月
- (2) 『奈良県水平運動史』 共著 部落問題研究所 1972年10月
- (3) 『近代日本部落問題研究序説』 兵庫部落問題研究所 1985年8月
- (4) 『奈良県の百年』 編著 山川出版社 1985年9月
- (5) 『城と川のある町 大和郡山歴史散歩』 編著 文理閣 1988年4月
- (6) 『教科書のなかの部落問題』 部落問題研究所 1989年6月
- (7) 『改訂増補版 教科書のなかの部落問題』 部落問題研究所 1990年12月
- (8) 『西園寺公望傳』 第二巻 <共著> 岩波書店 1991年9月
- (9) 『歴史の楽しさ 地域を歩く』 部落問題研究所 1999年12月

[2] 論文

- (1) 「明治10年代における外国貿易とブルジョアジー」『日本史研究』第35号 日本史研究会 1958年1月
- (2) 「日本帝国主義の端緒的形成」『歴史学研究』第253号 歴史学研究会 1961年5月
- (3) 「日本帝国主義の物質的基礎」『歴史学研究』第264号 歴史学研究会 1962年4・5月合併号
- (4) 「極東における帝国主義の形成」『日本史研究』第62号 日本史研究会 1962年9月
- (5) 「日本帝国主義の成立と構造」『日本史研究』第65号 日本史研究会 1963年3月 佐々木隆爾氏と共著
- (6) 「帝国主義への道」毎日新聞社編『近代日本の争点』(中巻) 毎日新聞社 1967年11月
- (7) 「現代における帝国主義研究の課題」『歴史評論』第207号 校倉書房 1967年11月
- (8) 「天皇制と部落問題」『部落』第226号 部落問題研究所 1968年2月 1999年12月、『歴史の楽しさ』に収録
- (9) 「水平社創立をめぐる」『部落問題研究』第26輯 部落問題研究所 1970年3月
- (10) 「日清・日露戦争」『岩波講座 世界歴史』(第22巻 近代9) 岩波書店 1971年9月
- (11) 「近代日本における水平運動の位置」『歴史評論』第261号 校倉書房 1972年4月
- (12) 「水平社創立の歴史的意義」『水平史運動史の研究』(第5巻) 部落問題研究所 1972年7月月 1976年12月, 補訂して『部落問題の史的究明』に収録
- (13) 「近代部落史研究の方法と課題」『部落問題研究』第34輯 部落問題研究所 1972年7月
- (14) 「部落問題研究の回顧と展望」 解題 『部落問題の史的究明』(歴史科学大系21) 校倉書房

- 1976年12月 1999年12月、『歴史の楽しさ』に収録
- (15)「雑誌『明治之光』とその時代」 解題『復刻版 明治之光』(下) 兵庫部落問題研究所
1977年2月 1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (16)「全水青年同盟の研究序章 その背景についてのノート」『部落問題研究』第53輯 部落
問題研究所 1977年7月 1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (17)「水平運動の到達点」『部落問題研究』第54輯 部落問題研究所 1977年9月
- (18)「日露戦争と民衆」宇野俊一編『日本史』(近代2) 有斐閣 1978年5月
- (19)「統一戦線と部落問題 『同対審答申』をめぐる政治的対抗」『戦後部落問題の研究』(第
7巻) 部落問題研究所 1979年10月 1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (20)「地域支配と部落問題 その歴史的諸段階」『部落問題研究』第62輯 部落問題研究所
1979年12月 1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (21)「天皇制と部落問題」『部落問題研究』第65輯 部落問題研究所 1980年12月
- (22)「日本近代史研究における部落問題の位置」『歴史評論』第368号 校倉書房 1980年10月
- (23)「自由民権運動と部落問題」『部落問題研究』第74輯 部落問題研究所 1982年12月
1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (24)「水平運動史研究の課題と方法」『部落問題研究』第76輯 部落問題研究所 1983年5月
1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (25)「太平洋戦争と文化財」『歴史地理教育』第366号 歴史教育者協議会 1984年4月
- (26)「賤称廃止令と明治維新」『部落問題 調査と研究』第52号 岡山部落問題調査研究所
1984年10月
- (27)「奈良県における水平運動の消滅」『奈良県近代史研究会 会報』第40号 奈良県近代史
研究会 1984年11月
- (28)「天皇制確立期の部落問題 町村合併について」『部落問題研究』第83輯 部落問題研究
所 1985年4月 1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (29)「太平洋戦争と文化財 『ウォーナー伝説』をめくって」『地域史と歴史教育』木村博一
先生退官記念会 1985年6月
- (30)「社会史研究と部落問題」『部落問題研究』第85輯 部落問題研究所 1985年10月
- (31)「地域史の方法について」『奈良歴史通信』第25号 奈良県歴史研究会 1985年12月
- (32)「『建国の聖地』の祝典と統合」『文化評論』第302号 新日本出版社 1986年5月 1999年
12月、『歴史の楽しさ』に収録
- (33)『近代日本の政局と西園寺公望』校訂・解題『近代日本の政局と西園寺公望』吉川弘文館
1987年1月 後藤靖氏と共著
- (34)「水平社創立について」『立命館人文科学研究紀要』第43号 立命館大学人文科学研究所
1987年3月 1991年5月、補訂して『近代天皇制国家の社会統合』に収録
- (35)「民主主義と歴史学」『現代を生きる歴史学』 大月書店 1987年5月 1999年12月、

『歴史の楽しさ』に収録

- (36)「水平社創立をめぐって」(その1)『部落問題研究』第91輯 部落問題研究所 1987年9月
- (37)「明治末期における未解放部落の状態」『部落問題研究』第92輯 部落問題研究所 1987年10月 1989年9月, 補訂して『近代日本の社会史的分析』に収録
- (38)「ファシズム期の部落問題」『近代日本社会と天皇制』柏書房 1988年5月
- (39)「歴史研究についての聞き取りの方法」『オーラル・ヒストリーと体験史』青木書房 1988年9月
- (40)「水平社創立をめぐって」(その2)『部落問題研究』第96輯 部落問題研究所 1988年12月
- (41)「部落問題の成立」『近代日本の社会的分析』部落問題研究所 1989年9月
- (42)「水平社創立をめぐって」(その3)『部落問題研究』第101輯 部落問題研究所 1989年9月
- (43)「天皇制研究について」『歴史評論』第478号 校倉書房 1990年2月
- (44)「近代日本のなかのフランス山脈 西園寺公望と中江兆民」『立命館国際言語文化研究』第2号 立命館大学国際言語文化研究所 1990年3月
- (45)「西園寺公望の井上毅批判 『梧陰存稿』書き込み本について」『日本史研究』第338号 日本史研究会 1990年10月 福井純子氏と共著
- (46)「近代天皇制は何によって支えられていたか」『争点 日本の歴史』(6) 近・現代編 新人物往来社 1991年5月 1999年12月, 改題して『歴史の楽しさ』に収録
- (47)「日本における社会調査の成立 部落調査を例に」『部落問題研究』第115輯 部落問題研究所 1992年1月
- (48)「『よき日のために』考」『部落問題研究』第116輯 部落問題研究所 1992年5月
- (49)「西園寺公望とフランス」『近代日本社会と思想』吉川弘文館 1992年5月
- (50)「近代日本社会における地域支配について」『歴史科学』第135号 大阪歴史科学協議会 1994年1月 1999年12月, 補訂して『歴史の楽しさ』に収録
- (51)「続・『よき日のために』考」『部落問題研究』第131輯 部落問題研究所 1994年12月
- (52)「歴史教育の現状と課題」『岩波講座 日本通史』(別巻1) 歴史意識の現在 岩波書店 1995年10月
- (53)「自由法学の誕生 岡村司の民法研究について」『立命館大学人文科学研究所紀要』第65号 立命館大学人文科学研究所 1996年2月
- (54)「文化財の誕生」『歴史評論』第555号 校倉書房 1996年7月
- (55)「歴史意識と歴史小説のあいだ 歴史家は司馬遼太郎をどう評価するか」『歴史評論』第562号 校倉書房 1997年2月
- (56)「真宗教団批判の展開 水平社創立をめぐって(その6)」『部落問題研究』第139輯 部落問題研究所 1997年3月

- (57)「近代日本文化財問題研究の課題について」『歴史評論』第573号 校倉書房 1998年1月
- (58)「近代京都における自由主義思想の源流」『立命館大学人文科学研究so 紀要』第70号
立命館大学人文科学研究so 1998年2月
- (59)「京都における水平社の成立 水平社創立をめぐって(その7)」『部落問題研究』第
151輯 部落問題研究所 2000年4月

[3] 史料紹介・書評など

- (1)「朝田理論による歴史分析の珠玉」『部落問題研究』第47輯 部落問題研究所 1976年3月
1985年8月、「渡部徹『部落解放運動』」と改題して、『近代日本部落問題研究序説』に収録
- (2)「奈良県における文化財保存の問題と保存運動」『ジュリスト』増刊総合特集第4号「開発
と保全 自然・文化財・歴史的環境 有斐閣 1976年7月 牧田りゑ子氏と共著
- (3)「地域に根ざした文化財保存運動」『奈良歴史通信』第12号 奈良歴史研究会 1979年5
月
- (4)「文化財保存運動の意味について」『奈良歴史通信』第13号 奈良歴史研究会 1981年6
月
- (5)「故中西義雄氏の歴史研究について」『月刊部落問題』第97号 兵庫部落問題研究所
1984年12月 1985年8月、『近代日本部落問題研究序説』収録
- (6)「壬申戸籍の保存と公開」『部落』第467号 部落問題研究所 1986年2月 1999年12月、
『歴史の楽しさ』に収録
- (7)「明治末期における未解放部落の状態」(1)～(5) 史料紹介 『立命館産業社会論集』
第21巻第4号、第22巻第1号～第4号 立命館大学産業社会学会 1986年3月～1987年3
月
- (8)「歴史学研究会・日本史研究会 『講座日本史』近代1・近代2」 書評 『歴史評論』第
440号 校倉書房 1986年12月
- (9)「岩井忠熊 人と学問」『天皇制と日本文化論』文理閣 1987年8月
- (10)「佐々木隆爾『世界史におけるアジアと日本』」『土地制度史学』第125号 土地制度史学会
1989年10月
- (11)岡村司『西遊日誌』(その一)～(その四)『立命館産業社会論集』第30巻第4号～第31巻
第3号 立命館産業社会学会 1995年3月～1995年12月 福井純子氏と共同
- (12)史料紹介「岡村譴責事件に関わる史料について」『立命館百年史紀要』第3号 立命館大学
1995年3月
- (13)「立命館大学法学部蔵 岡村司文書目録および解説『岡村司文書について』」『立命館法学』
第265号 立命館大学法学部 1999年10月

(この目録は同学の友人である竹末勤氏に作っていただいたものに加筆したものである。同氏の御好意に深く感謝したい)。